

1629 RCTによる肝疾患診断の検討

今枝孟義、又吉純一、加藤敏光、広田敬一、
後藤裕夫、土井偉誉(岐大、放)

肝疾患において single photon CT 像と従来の四方向肝シンチグラム像、X-CT 像とを比較検討し、single photon CT 像の臨床的有用性につき報告する。

患者に ^{99m}Tc -phytate 10~20mCi を静注し 15 分後に仰臥位をとらせ、検出器を 10 度毎、回転させ、そのつど呼吸停止下で 10 秒間程の時間をかけて撮像し、全部で 36 枚の肝イメージをシンチパック 1,200 に収録し横断層像、前額断層像、側面断層像を複製した。

single photon CT は限局性肝疾患のうち表在性腫瘍の検出には劣ったが、内部腫瘍の検出には従来の四方向肝シンチグラムと同等かそれ以上の検出率を示した。更に X-CT で検出しえなかった転移性肝癌を早期に鮮明に検出しえた。びまん性肝疾患においては、RCT 像によって肝臓を立体的に把握することが出来、形態学的変化を正確に診断し臨床的に有用であった。

1630 肝内占拠性病変に対する ECT の有用性

工藤正俊、藤見勝彦、富田周介、小森英司、
遠藤義彦、沖本芳春、藤堂彰男、北浦保智(神戸
中央市民、消内)、森本義人、伊藤秀臣、大城徳成、
山本和高、池窪勝治、(同核医学)、森徹(同内科)

近年 RI を用いた ECT が漸次臨床応用される様になって来た。今回、我々は肝内占拠性病変に対する ECT の有用性を一般肝シンチ、エコー、X 線 CT および血管造影と比較検討した。臨床症状および各種生化学検査にて肝腫瘍が疑われた症例を対象とした。

ECT 検査と X 線 CT, エコー, および血管造影検査との間隔は、2~3 週間以内とした。装置は、ECT: GE Maxi Camera 400T, X 線 CT: GE CT/T 8800, エコー: Aloka SSD 250 及び SSD 256 を使用した。

①従来の肝シンチに比べ明らかに分解能が向上し、特に深部病変及び肝左葉病変の検出能が向上した。又、欠損は、より明確に描出され、位置大きさの評価が容易となった。②X 線 CT との比較では、(i)コントラストに優れ、X 線 CT の欠点である isodensity tumor, partial volume phenomenon, artifact 等による見落しが少ない。(ii)Function の評価も可能である。(iii)従来の肝シンチに引き続いて実施する事により被験者の被曝量の増加がない。(iv)造影剤による Enhancement の煩雑さが少ない。という点で優れていた。

1631 肝胆道疾患の総合画像診断 (RI, RCT, XCT, US のクリニカル・エフィカシー)

野口雅裕、大塚幸雄(東邦大、一内) 田淵博己
大竹英二、村田啓、千葉一夫、山田英夫(都養
育院、核放) 川口新一郎(久留米大、二内)
飯尾正宏(東大、放)

肝胆道疾患 47 例に、RI, RCT, XCT, US の 4 検査をほぼ同時期に行ない各検査のクリニカル・エフィカシーの検討を行なった。RCT は、新しく開発された島津社製 LFOV-E を用い、被験者のまわりを 10° ずつ 36 方向より 1 スライス 10 秒かけ撮影し、画像の再構成はフィルターバックプロジェクション法によった。7~9 人の放射線科医に 47 例各々を (1)肝占拠性病変 (2)肝硬変 (3)胆道疾患 (4)肝外性病的圧迫 (5)びまん性肝疾患 (肝硬変を除く) (6)その他の異常の各項目につき、RI 単独、RCT 単独、XCT 単独、US 単独、4 検査総合、RCT+RCT 時に撮影した多方向 RI について、病変の有無の読影を依頼し、ROC 曲線を作成し解析した。各検査の各病変に対するエフィカシーが定量的に評価され、総合画像診断は各単一検査による診断能を上まわった。RCT は、画像評価 GOOD, FAIR, POOR の 3 段階で、FAIR 50%, GOOD 38% であり、RI に比し特にすぐれず改良が必要と思われた。